■特集■戦後七〇年に考える

佐佐木信綱『盲人歌集』を読む

奥田亡羊

一、はじめに

戦時中、戦場の兵士たちの歌をあつめた歌集が数多く出版された。これらの歌集に収録された兵士の歌は、人間の記録として永遠に意味を失うことはないだろう。だが、戦意高揚や愛国精神の発揚など、歌集が編まれた大義名分的な目的の陰に隠れて、選者となった一人一人の歌人がどのような短歌観にもとづき、どのような歌を選んだのかは、これまであまり注目されてこなかったように思う。そこで今回は佐佐木信綱がどのような視点で兵士たちの歌を選んだのかを検証してみたい。

『佐佐木幸綱全歌集』（ながらみ書房）の年譜によると、信綱が編集に直接的に関わった兵士の歌集は次の通りである。

① 斎藤茂吉・佐佐木信綱選『支那事変歌集』（三省堂）一九三八年
② 佐佐木信綱・伊藤嘉夫選『傷痍軍人聖戦歌集』二冊（人文書院）一九三九年
③ 佐佐木信綱選『盲人歌集』（墨水書房）一九四三年
④ 佐佐木信綱・伊藤嘉夫選『失明軍人歌集戦盲』（新大衆社）一九四三年
⑤ 佐佐木信綱・伊藤嘉夫選『失明軍人歌集心眼』（大雅堂）一九四五年

ここにあげられているのは信綱が主体的に編集した主な歌集である。もちろん当時の歌壇の重鎮として信綱が間接的、直接的に編集に関わった歌集はもっと多い。だが信綱が兵士の歌とどう向き合ったのかを知るには、むしろこの方がわかりやすいだろう。右に見たように信綱は傷痍軍人の歌集を何冊も編んでいる。これは信綱が一九三九年九月から「心の花」の歌人で、信綱の秘書的な役割も果たした伊藤嘉夫とともに毎週一回、臨時東京第一病院（陸軍病院）に収容されていた傷痍軍人のもとを訪れ、万葉集の講義と作歌指導を行ったためだ。その回数は百回に及んだという。とくに信綱は、戦争によって失明した視覚障害者の歌を継続的に集め、出版した。臨時東京第一病院で信綱が接していた傷痍軍人はもちろん視覚障害者だけではない。あえて失明した軍人たちの歌だけを集めて繰り返し歌集を出版した背後には信綱の何らかの文学的な問題意識が働いているはずだ。それがどのようなものだったのか。『盲人歌集』を中心に考えてみたい。

『盲人歌集』は戦争で失明した軍人たちの歌を集め、信綱が単独で選をして出版した歌集である。前半に傷痍軍人四十四人の歌二七一首を、後半に視覚障害を持つ歴史上の歌人たちの短歌二三四首と長歌三首を